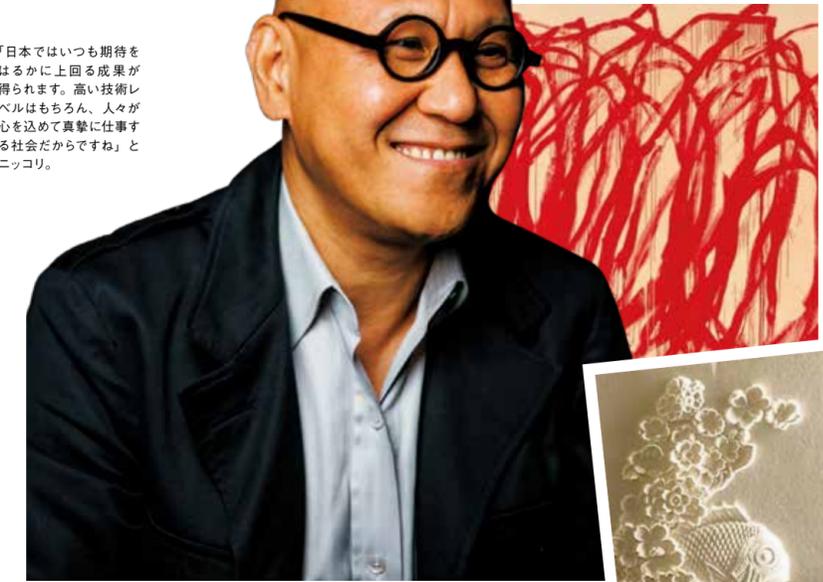
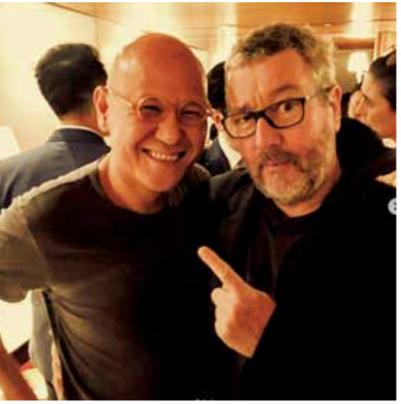
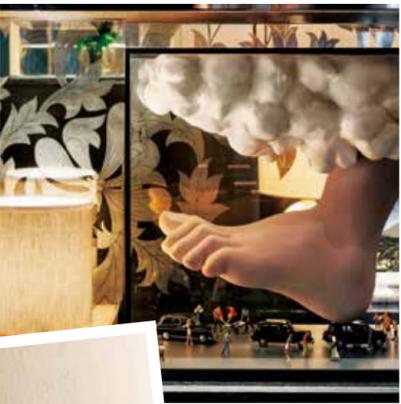
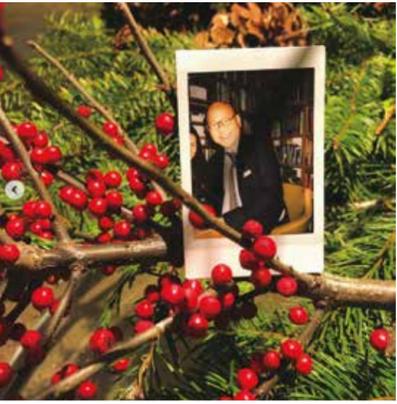




デザインのヒントは日常にあり？

旅の思い出、進行中のプロジェクト、そして創作のインスピレーション。発想の過程が伝わるチー氏の華麗なインスタグラム。本人のアカウント@tonychi_official、スタジオは@tonychistudio。



「日本ではいつも期待をはるかに上回る成果が得られます。高い技術レベルはもちろん、人々が心を込めて真摯に仕事する社会だからですね」とニコリ。

TORANOMON

The Sophistication of Consideration

トニー・チーの“視点”

インテリアデザイナーのトニー・チーは、2021年にオープンする虎ノ門ヒルズ レジデンシャルタワーで初めて住宅のインテリアを一棟担当します。東京に一体どんな楽しい仕掛けを提供してくれるのか、彼のインスタに、そのヒントがありました。

photo (Instagram) _Tony Chi
text_Mika Yoshida & David G. Imber
edit_Kazumi Yamamoto



1989年に仕事で初めて日本を訪れて以来、数え切れないほど日本に通い続けてきたトニー・チー。アラン・デュカスを始めとするスターシェフのレストランやラグジュアリー・ホテルのインテリアを世界中で手がけてきた彼は、国内では「アンダーズ 東京」や「オーク・ドア」(グランド ハイアット 東京)などを設計している。虎ノ門ヒルズ レジデンシャルタワーを手がけるにあたっては、グラマラス・リビング、つまり「豊かなライフスタイル」を日本の文脈の中で目指したと語ってくれた。

「豊かさという言葉は誤解を招きがちですが、何も高価な宝石を指すわけではありません。人間のもっとも豊かな特性とは、きめ細やかな気配りです。そして日本人ほど、この“気配り”に長けている人々はいません」とチー氏。気配りとは、言いかえれば人の人と円滑に結び日本独自の「心の距離調整」だ。また、建物に足を踏み入れた時に感じる「自分の場所らしさ」も、何よりの豊かさとする。今回のデザインに際し、西洋的なこれみよがしの華美さではなく、他者

や世界とのつながりにおいて調和する美意識を何よりも念頭に置いたという。

幼少時からマンハッタン育ちのチー氏。だだっ広いアメリカの住宅とは対照的な、一定の広さの中に充足感を見出す日本の美徳を、特に追求した。そんな中でもキッチンをあえて目にするようにしたそう。そうすることで訪問客に自分の「素顔」を示すことができるという。ちょうど本棚を見ればその人の頭の中身が伝わってくるのと同じですね、と笑う。

「自宅に大勢の人を頻りに招くという習慣は日本には根付きづらいかもしれません。でも…」と続ける。「アメリカで友人宅に遊びに行った時のことです。その家には本格的なバーカウンターがあり、友人のお父さんが後ろでマティーニを作っては皆に振る舞ってくれました。自宅にバーとは何て素敵なんだ!と感激しましたね。」この思い出が、レジデンシャルタワーの一階にバーを作るという発想に結びつく。キャパシティはおよそ30人ほど。「レジデンシャルタワーには3つの側面があります。プライベート

と、これは自宅部分。そしてセミプライベート。タワー内には住人専用のクラブハウスがあり、ライブラリやリビングも備えていて他の人達と交流してもよし、一人でいてもよし。そして最後はパブリックで、これが一階のバーですね。自宅に気軽に招く感覚で、仕事帰りに仲間と一杯傾けながら談笑できる。家の延長としての公共空間だ。「住宅の一階でバーが実現できるのも日本ならでは。これがNYだと、住民から騒音や風紀の乱れを懸念する声がたくさん上がります。ですが、日本には行儀良くスマートにお酒とつきあえる文化素地がありますね。これも他者への気配りに根ざすものなのです。」

このタワーは内側から外へと向かうデザイン、と語る。たしかに外界から家の奥へといわば逃れていくような一般的な西洋の集合住宅とは、まるで異なる発想だ。これもすべて、インスタグラムにも伺えるチー氏のセンスがあってこそ。「外からの視点」が見きわめた日本の特性をデザインに活かし、街へと開かれたタワーが誕生していくのである。

MASTERPIECES OF TONY CHI

ヒルズで体験するとニーズ・デザイン



アンダーズ 東京 (虎ノ門ヒルズ / 2014年)

2005年、1991年にソビエト連邦から独立を果たしたエストニアが国立博物館をソ連支配下時代の軍用施設跡地に建設するための設計競技を開催。田根はダン・ドレル、リナ・ゴットメとともに(メモリーフィールド)と題した提案を行



ステーキハウス オークドア (グランドハイアット東京 / 2003年)

2005年、1991年にソビエト連邦から独立を果たしたエストニアが国立博物館をソ連支配下時代の軍用施設跡地に建設するための設計競技を開催。田根はダン・ドレル、リナ・ゴットメとともに(メモリーフィールド)と題した提案を行

COMMUNICATION

世界中の観客と対話できるステージ



(仮称) 虎ノ門ヒルズ ステーションタワー
ビジネス発信拠点
2023年7月竣工予定

RESIDENCE

都心のと真ん中での豊かな暮らし



虎ノ門ヒルズ レジデンシャルタワー
2021年竣工予定

TRANSPORTATION

交通の結節点となり世界中から多様な人が集まる



(仮称) 虎ノ門ヒルズ ステーションタワー
駅前広場
2023年7月竣工予定



虎ノ門ヒルズ ビジネスタワー
イノベーションセンター「ARCH」

BUSINESS

オフィスの垣根を取り払って生まれるイノベーション



GREEN

緑の中で木漏れ日やこちよい風を感じる

(仮称) 虎ノ門ヒルズ ステーションタワー
2023年7月竣工予定



虎ノ門ヒルズ ビジネスタワー
虎ノ門横丁

CULTURE

食やアートなどあたらしいカルチャーが生まれる場

働く、住む、学ぶ、遊ぶ、出会う、憩う。
そのすべてがここ「虎ノ門ヒルズ」にある。

虎ノ門の街が今、大きく変わろうとしています。2014年に開業した「虎ノ門ヒルズ森タワー」を皮切りに、今年6月には「虎ノ門ヒルズ ビジネスタワー」が開業。さらに2021年に「虎ノ門ヒルズ レジデンシャルタワー」が、2023年には「(仮称) 虎ノ門ヒルズ ステーションタワー」が完成する予定です。森タワー竣工からわずか9年という異例のスピードで、4棟の超高層タワーを中心とした画期的なひとつの「街」が生まれ、「グローバルビジネス

センター」というコンセプトがいよいよ実現します。森ビルが目指す「グローバルビジネスセンター」とは、世界を飛び回るグローバルプレーヤーたちが住み、働き、訪れたい磁力を持った都市であり、生活のすべての側面において豊かな環境を実現できる都市のこと。ここ虎ノ門の約7.5ヘクタールもの広大な敷地には、延床面積約30万㎡(東京ドーム約6.5個分)のオフィスと約800戸のレジデンス、さらに商業施設や

ホテルが備わり、これは「六本木ヒルズ」に匹敵する大きな規模になります。環状2号線など道路整備と一体化して計画が進められたため、羽田空港や臨海地区と一直線につながり、東京メトロ銀座線・虎ノ門駅、さらに日比谷線に新しく開業した虎ノ門ヒルズ駅とも地下で直結するなど、交通アクセスも抜群。また周辺でも複数の再開発が進む中、今後ますますグローバル企業がこの虎ノ門エリアに集まり、互いに交流することでイ

ノベーションが生まれ、外国資本からも注目される街づくりが推進されます。さらには、ここで働き、暮らす人が快適で豊かな生き方を実現できるよう、緑豊かな環境や文化・情報発信面での充実も図られます。ビジネス面だけでなく、ライフスタイルにとっても真に魅力ある都市づくりを都心部で実現することに大きな意義があります。働き、暮らし、遊び、学び、集い、憩う。そのすべてがこの「虎ノ門ヒルズ」に集約されます。

